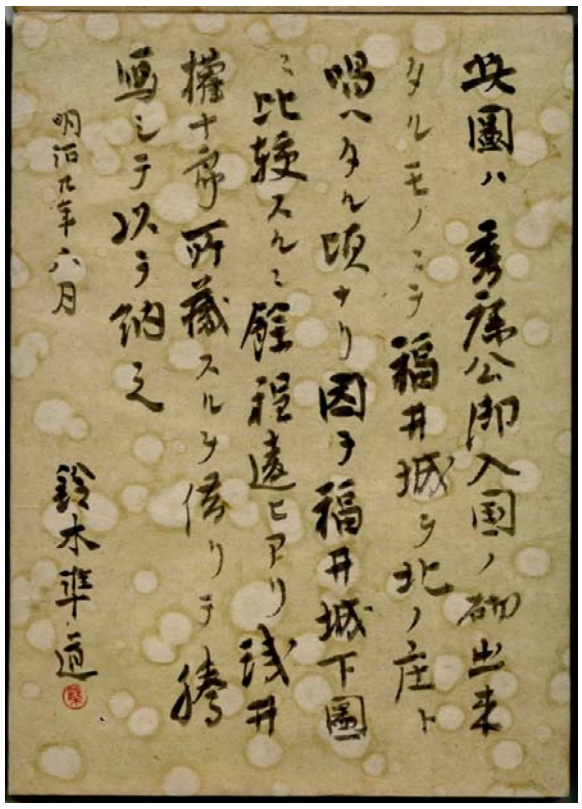
浅井家にのこされた二つの絵図

今回新たに発見された二つの絵図は、八百里（やおり）の子息、権十郎（政由（まさより））所蔵のものであったことがわかりました。その根拠の一つは、松平文庫にのこされた絵図Ⓔの端書にあります。



Ⓔ「越前北ノ庄城ノ図」端書
松平文庫 1310（M73-2） 福井県立図書館保管

権十郎さんが持っていたものを借りて写しました

意訳 この図は秀康公が入国したおり、福井城を北ノ庄と呼んでいた頃にできたものです。ですから現在の福井城下の図と比較すると、ずいぶん違います。浅井権十郎が所蔵していたものを借りて謄写し、ここに納めます。
明治 20 年（1887）6 月　　鈴木準道㊞

『稿本福井市史』上巻より鈴木準道

この図を写した鈴木準道（のりみち）（1841～1921）とは、初代の福井市長に選ばれた人物で、松平家に伝存する諸資料をもとに多くの編著書・写本を書きとめています。この図は市長に選ばれる 2 年前の明治 20 年に書き写していることがわかります。

左：Ⓔ「越前北ノ庄城ノ図」
松平文庫 1310（M73-2） 福井県立図書館保管
右：Ⓓ「慶長御城下絵図」
森永与右衛門家文書 A0029-00050（整理中）

Ⓕ「天保福井御城下絵図」印影
森永与右衛門家文書　A0029-00051（整理中）

Ⓔと、浅井家にのこされていた絵図Ⓓとを比較したところ、詳細な点まで一致したため（ほかの写図とは一致しません）、Ⓔの謄写元がⓈであると考えられます。

また、Ⓓと「天保福井御城下絵図」にはともに「浅井氏印」という捺印Ⓕと記名があり、これらを合わせて考えると、この二つは浅井家所蔵のものであることが確認できました。

「慶長御城下絵図」と、「天保福井御城下絵図」。なぜこの二つの絵図が、浅井家にのこされたのでしょうか。

慶長の絵図は大判で、福井の城下創成期のようすを細かくうかがい知ることができ、また当時とは異なる屋敷地の変遷がわかる内容です。

いっぽう天保の絵図は、ハンディサイズで実用的です。下級家臣の所在についての記述が特に充実していて、多くの修正箇所があり、実際に持ち歩いて活用していたと考えられます。

これらの絵図は用途は違いますが、ともに福井藩の人事管理文書を作成するために、用いられたようです。八百里や権十郎は、これらの絵図を片手に、福井藩の骨格となる仕組み作りに励んだのでしょう。